

ひとつの歴史の教訓の「囚われ人」となる勿れ

——第1次世界大戦勃発百年



Makoto Ichibe

いおきべ・まこと
1943年生まれ。京都大学
法学部、同大学大学院法
学研究科修士課程修了。広
島大学助教授を経て、神
戸大学大学院法学研究科
教授。その後、防衛大学校
校長を経て現職。公職、著
書多数。文化功勞者。

熊本県立大学理事長
ひよご震災記念21世紀研究機構理事長
五百旗頭真

人類史上、新興国が台頭し現状打破を試みる時、しばしば戦乱を招いてきた。バランスが乱れるのは危険だと言われる所以である。では、均衡があれば平和か。その反証が第1次世界大戦である。あれほど戦力・国力がバランスしていても、不信と敵意が溢溢していれば、サラエボの銃声1発で各国は大戦争にのめり込んだ。

今年、第1次世界大戦開始から百年である。
今から当時を振り返ると不思議なことに、いずれの交戦国も自分たちが勝つと思っていた。加えて、多くの人が2〜3週間の短期戦、長くても3カ

月で戦争が終わると思っていた。事実、台頭したドイツの陣営とそれに脅威を感じた英仏露側は、何年も殺戮を応酬して、なお互いに戦線を破ることができないほどに均衡していた。何と4年を超える総力戦となったのである。

平和はどんな時に可能か。一言で言えば、優位を得た側が自制的に振る舞う場合である。普仏戦争に勝利したドイツのビスマルク時代や、冷戦期の米国がその例である。米国の対ソ封じ込め政策は、優位にあった米国がソ連に

膨張の試みを許さず、自制を強いつつ、自らもソ連に攻め込まない方針をとって自制したのである。「長い平和」(ジョン・ギャデイス)が可能となった。

次の時代を担うべきおびただしい若者たちを犠牲にした西欧諸国は、第1次世界大戦が終わった時、茫然自失、もう戦争はこりごりだと感じた。第2次世界大戦後の日本が抱くことになった戦後平和主義を、西欧は一足早く経験した。それだけに、もし対ドイツ講和条約が穏当なものであれば、「かりそめに戦はずまじ」との姿勢を欧州は共有できたかもしれない。

だが、ベルサイユ講和はあまりにも一方的に敗者ドイツに苛酷であった。ドイツ国民の間に、それへの悲しみを超えて憤りが拡がった。これを巧みに利用したのがヒトラーであった。そのベルサイユ条約破棄、再軍備、ラインラント進駐などの言動に、少なからぬドイツ国民がしびれた。

ヒトラーが「民族自決」の名において、チェコのズデーテン地方を領土要求した1938年、チェンバレン英首相はミュンヘンに飛んだ。「これが最後の望みである」というヒトラーの言葉を容れ、チェンバレンは望みだけをなえた。もう一度、悲惨な戦争だけは避けたかったのである。他方、ヒトラーはまだドイツの軍力は英仏に及ばなかつたが、英仏が戦争を恐れていることを見て取って、ブラフをかけた成功したのである。これにはずみを得たヒトラーは、力を背景にした現状打破と膨張をとめどなく繰り返し、前大戦を上回る6年の大戦乱に世界を巻き込んだ。

「ミュンヘンの宥和」は、繰り返してはならない歴史の教訓と記憶されることとなった。トルーマン大統領が朝鮮戦争に介入したのも、それ故である。若きJ・F・ケネディもハーバード大学生として「イギリスは何故眠っていたか」と題する論文を書いて「ミュンヘ

ンの宥和」を批判した。

大統領となったケネディをキューバ危機が襲った。キューバ防衛用のミサイルと称しながら、フルシチョフのソ連は、米国の主要都市をほぼ攻撃できる中距離ミサイルを搬入しつつあった。「ミュンヘンの宥和」を教訓とするなら、キューバ進攻論や爆撃論を採用してもよかつたはずである。ところが、大統領はB・タックマンの名著『八月の砲声』を想起した。視野狭小な強気論の応酬が、誰一人望まなかつた死闘に全欧州を沈めた第1次世界大戦開戦の誤りを繰り返すまいと考えた。ケネディは世界を核戦争に巻き込まない考慮をめぐらしつつ、ミサイルを撤去させることに成功した。

今、中国の台頭を前に、われわれはさらに難しい事態に直面している。一つの歴史の教訓の「囚われ人」となることなく、聡明な総合的対処をなし得るだろうか。